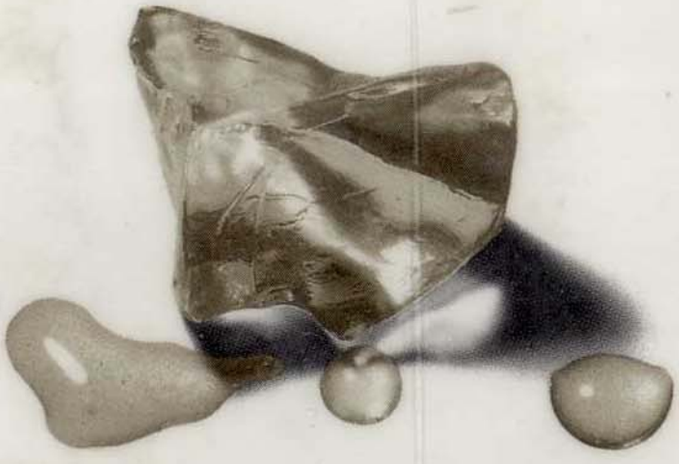
DOCTORS IN ISOLATED ROOM

冷たい密室と博士たち

森博嗣

面白ければ良いんだ。
面白ければ、
無駄遣いではない。
子供の砂遊びと同じだよ。
面白くなかったら、
誰が研究なんて
するもんか。



Hiroshi Mori

講談社
NOVEL

N. D. C. 913　298p　18cm

冷たい密室と博士たち

一九九六年七月五日　第一刷発行　一九九七年七月一〇日　第六刷発行

KODANSHA NOVELS

定価はカバーに表示してあります

著者―森博嗣
© HIROSHI MORI 1996 Printed in Japan
発行者―野間佐和子

発行所―株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二―〇一　編集部〇三―五三九五―三五〇六
販売部〇三―五三九五―三六二六
製作部〇三―五三九五―三六一五

印刷所―廣済堂印刷株式会社　製本所―和田製本工業株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第三出版部あてにお願い致します。
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

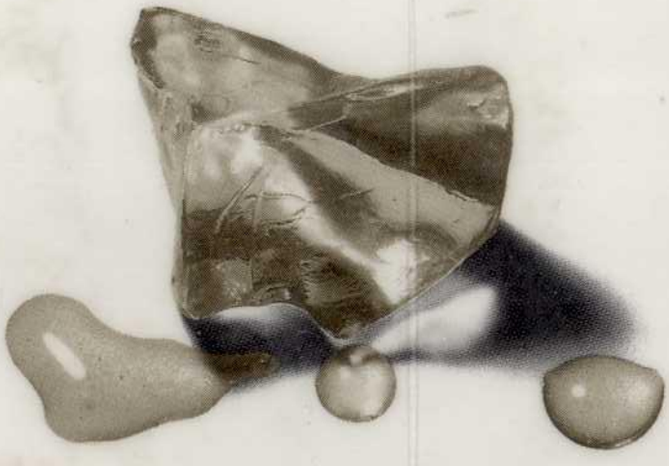
ISBN4-06-181917-8（文三）

DOCTORS IN ISOLATED ROOM

冷たい密室と博士たち

森博嗣

面白ければ良いんだ。
面白ければ、
無駄遣いではない。
子供の砂遊びと同じだよ。
面白くなかったら、
誰が研究なんて
するもんか。



Hiroshi Mori

講談社
NOVEL

ISBN4-06-181917-8

C0293 ¥777E (0)

定価：本体777円
※消費税が別に加算されます。

19202930077 79

冷たい密室と博士たち

森 博嗣

森博嗣氏は、その第一作「すべてがFになる」で、本格ミステリが電脳空間（サイバースペース）の大海へ乗り出す豊饒（ほうじょう）な可能性を示してくれた。またしても新しい波（ニューウェーブ）の予感。
……Watch for HM!

山口雅也

ここにあるのは精妙な計測装置だ。
我々は計るのではなく、ただひたすらに計られる——。

竹本健治

冷たい密室と博士たち

森 博嗣

KODANSHA NOVELS

講談社ノベルス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ブックデザイン＝熊谷博人
カバーデザイン＝辰巳四郎

目次

第1章：始動する思考――10
第2章：整理される事前――32
第3章：実験と観察――56
第4章：発見される事後――79
第5章：眠気と白骨――102
第6章：仮説と矛盾――121
第7章：情報とカオス――146
第8章：凍りついた冒険――174
第9章：導かれた密室――198
第10章：侵入する憂鬱――215
第11章：曖昧な追跡――234
第12章：背理の手法――248
第13章：真実の一部――281
解説――というより、ひとりのevangelistとして――太田忠司――292

DOCTORS IN ISOLATED ROOM

by

Hiroshi Mori

1996

登場人物

極地研の教官

木熊　京介（きくま きょうすけ）……教授
喜多　北斗（きた ほくと）……助教授
市ノ瀬　里佳（いちせ りか）……助手

極地研の職員

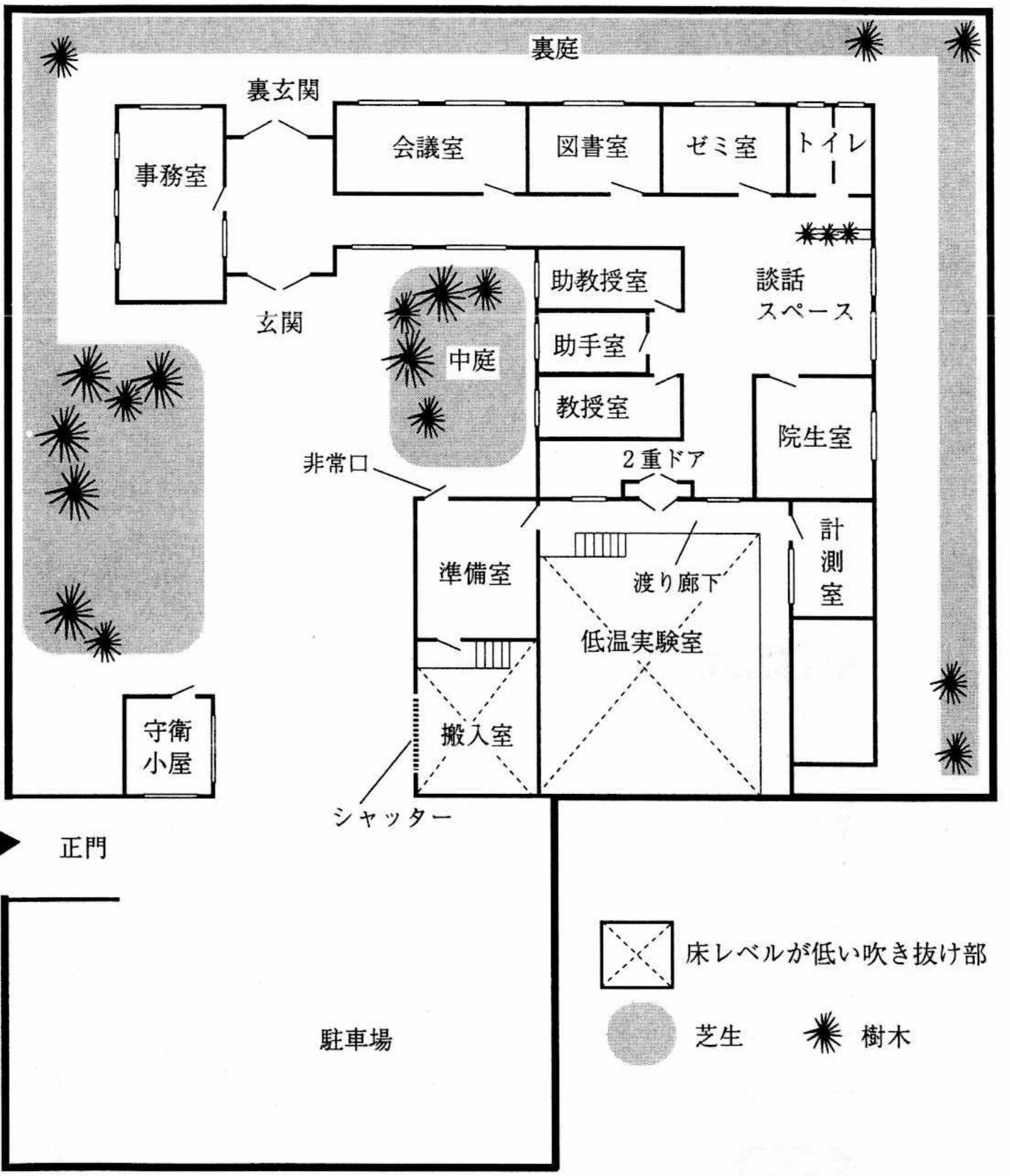
八川　善太郎（はちかわ ぜんたろう）……技官
横岸　卓也（よこぎし たくや）……事務官
中森　敬子（なかもり けいこ）……事務官
鈴村　春江（すずむら はるえ）……図書事務員
向井　浩二（むかい こうじ）……守衛
小川　昌三（おがわ しょうぞう）……守衛

極地研の学生

丹羽　健二郎（にわ けんじろう）……大学院生Ｄ２
服部　珠子（はつとり たまこ）……大学院生Ｍ２
荒井　正直（あらい まさなお）……大学院生Ｄ１
船見　真智子（ふなみ まちこ）……大学院生Ｍ１
若林　真二（わかばやし しんじ）……大学院生Ｍ１
北大路　智也（きたおおじ ともや）……大学院生Ｍ２
下柳　久志（しもやなぎ ひさし）……大学院生Ｍ２
増田　潤（ますだ じゅん）……２年まえに失踪した学生

その他

犀川　創平（さいかわ そうへい）……建築学科助教授
国枝　桃子（くにえだ ももこ）……建築学科助手
西之園　萌絵（にしのその もえ）……建築学科２年生
西之園　捷輔（にしのその しょうすけ）……萌絵の叔父


裏庭
裏玄関
事務室
会議室
図書室
ゼミ室
トイレ
玄関
中庭
助教授室
助手室
教授室
談話
スペース
院生室
非常口
2重ドア
計
測
室
準備室
渡り廊下
低温実験室
搬入室
守衛
小屋
シャッター
正門
駐車場
床レベルが低い吹き抜け部
芝生
樹木

Kirchhoff と Neumann の一意性の定理はポテンシャル論に対する基礎である。なぜならば、解の一意性が確立されるときは、与えられた境界値問題の一つの解を求めれば、〝その〟解が真の解となるからである。

しかし、何らかの方法で、解の一意性が成り立たなくなる可能性があるということが、この理論については重要である。すなわち、弾性柱が座屈したり、薄い殻が崩壊したり、航空機の翼がフラッタしたり、機械が何らかの意味で不安定になりうることがわかっている。〝安定性〟という語は、多くの意味をもっている。したがって、安定問題を定義するには、安定性という語の意味を定義しなければならない。ところが、広い種類の実際の安定問題は、解の一意性が成り立たなくなることと関連している。ある環境のもとに二つ以上の解が可能となり、これらのあるものは工学的な見地から危険となるかもしれないし、あるいは機械の機能に対して望ましくないかもしれない。このような場合、その環境は不安定を生ずるといわれる。

(Foundations of Solid Mechanics / Y.C.Fung)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第1章　始動する思考

1

「犀川先生のお考えになった微積の問題ですが、これは……、ここの微分方程式の一般解を求める部分が、高校生の教科書には載っていない。それに、そうですね……、力任せに計算すると、ちょっと三十分では解けないのではないでしょうか」発言したのは中年の教授である。

「僕もそう思っています」犀川助教授は答える。

「でも、yを左辺に移行して積分することに気がつけば五分で答にたどり着くでしょう？」

「それに気がつく人が何人いると思いますか？」

「たぶん、一割か、二割でしょうね……。いけませんか？　それが試験というものではありませんか？　少なくとも、この問題で、人間をフルイにかけようというのですからね……、全員が解ける問題を作ったってしかたないでしょう……」犀川は、なるべく感情を出さないように淡々と言った。

そう、試験というものは本来そういうものだ。誰でも解ける問題を出して、落ちこぼれを見つけるのではない。解けそうにない問題を出して、秀でた才能を発見する。しかし、これを言っては喧嘩になるので発言はしない。普通の頭脳なら、犀川の言葉で十分に気がついたはずだ。

「そういった閃きが必要な問題は、敬遠されますよ」他の男が上品な声で言う。「そういう問題が出ると評価されることは、イメージ的にマイナスで

す。やはり、平均点が六十から七十くらいにはして欲しい」

評価するという動詞の主語は何だろう、と犀川は思う。マスコミか、それとも予備校か……。

「わかりました……、では、僕の問題は取り下げて下さい」犀川は微笑んで言う。これ以上、自分の主張を通すことは無意味だ。

「いや、この問題が優れているのは確かなんですよ」最初の教授が委員長を見ながら言う。「何か、もう少し、エレガントでシンプルなものに工夫できないでしょうか？」

誰でも、表現だけなら綺麗な単語を知っている、と犀川は思う。

「エレガントというのは、閃きが必要だという意味ではないですか？」犀川は言った。「シンプルというのは意味がいろいろだと思いますが……。力任せでも解けるようにしたら、エレガントでもシンプルでもなくなりますね……。きっと……」

「まあ、その線で、もう少し考えていただけませんか？」委員長が犀川を見て言った。「この問題に関しては、来週また検討しましょう」

犀川は、しかたなく頷く。

それから、彼は、しばらく発言を控えた。頭の中で、自分の意見をまとめるだけで、表向きは無表情に振る舞う。

犀川は、自分の授業でも試験は一切しない。問題を解くことがその人間の能力ではない。人間の本当の能力とは、問題を作ることだ。何が問題なのか発見することだ。したがって、試験で問題を出すという行為は、解答者を試すものではない。試験で問われているのは、問題提出者なのである。どれだけの人間がそれに気がついているだろう……。

2

犀川創平は、研究室の自分の部屋に戻ってきた。

安物のプラスチックのブーメランのように、飛び出したときの勢いだけで彼は帰還する。回転力はしだいに失われ、疲れ果てて、ふらふらになって帰ってくる。部屋を出れば、エネルギーは消耗されるだけである。

もちろん、そうなることはわかっていた。

何か面白い発見があるなんて微塵も期待はしていなかったし、自分の持っている時間の一部を無駄に過ごす覚悟くらいできているつもりである。それでも、無意味な時間のあとには、下品なセールスマンに仕事を中断されるときと同一の不快感が必ず残るものだ。簡単には割り切れないのである。

そんな人間社会の執拗な攻撃にはもう慣れているはずなのに……。

三時間ほどまえに嫌々部屋を出るとき、彼はクーラーを止めなかった。だから、誰もいない部屋の温度を保つために、ずっとエネルギーが無駄遣いされていたのである。帰ってきたときに、せめてそれくらいの憩いが欲しかっただけだ。今、廊下の殺人的な熱気から突然解放され、犀川は思わず溜息をついた。

（まったく、馬鹿ばっかりだ）

そして、自分も……、たぶんその一員だと思う。そのことの方が腹立たしい。

委員会のファイルをデスクにどんと置く。それは、キャンパス内の生協で売っている一番安い紙製のファイルである。委員会の資料というのは、内容の重要さに反比例して分量だけは膨大だ。たいてい、この安物のファイルの許容量を超えることになるが、座布団みたいに膨らんでも、なんとか一ヵ所に閉じ込めておきたいと感じるためか、無理矢理に挟み込んでいることがほとんどである。

一時間で終わるはずの委員会は、もちろん予想どおりだが、三時間かかった。入学試験関連の委員会である。夏休みの八月に開催されるのはこの委員会くらいかもしれない。年度末に行われる二次試験の

問題を検討するための委員会で、犀川は、数学の問題作成委員であった。他の科目よりはいくらか気が楽である。どこで、誰が決めているのか知らないが、「親展」と赤字で書かれた封筒が年度の初めに届く。中身は、一枚の紙切れで、動詞は「任命する」しかない一行の辞令。だから、「親展」という単語にマイナスのイメージを持つようになったのは最近である。入試に関しては、誰が委員なのか公表されないから、一週間に一度、非生産的な労働に駆り出されている苦労は周囲には知られない。いや、彼のいる世界では、それが当たり前なのだ。誰が何をしているのか、誰も監視していない。それが大学という職場なのである。

犀川は、そもそも、会議と名のつくすべての存在を生理的に受け付けない。もちろん、その場では、彼の持っている忍耐の最大出力で切り抜けるのだが、長い拘束から解き放たれると、いつも解放感よりは脱力感に支配される。最も驚くべきことは、会議が好きな連中がいる、という事実である。会議を長引かせている人種が、肌の色の違いよりも明確に犀川には識別できた。

（あれだけのことを決めるだけに、どうして三時間もかかるんだろう）

日頃、研究室に閉じ籠(こも)っているから、会議というものが一種の社交場とでも思っているのかもしれない。異人種たちは、それが必要な「親睦(しんぼく)」だと感じているのだろう。おそらく、そうだろう……。頭脳明晰(めいせき)な人間たちが、あんな無駄話をするというのは、そうとしか考えられない。その動機は認めよう……。間違った感情ではない。人間にはそういった弱さがあるものだ。しかし、犀川のような他人種を巻き添えにしないで欲しいものだ。望みはそれだけなのだ。

いや、もしかしたら、彼らは他人種との親睦を求めているのかもしれない。それならば、彼らの目的は表面的には達成され、実質的には逆効果である。

忌々しいファイルをスチール棚に押し込む。部屋の小さな冷蔵庫を開けて、缶コーラを取り出した。最後の一本だった。犀川はアルコールがほとんど飲めない。そのかわり、夏はコーラを毎日消費する。それから煙草に火をつけた。最近の学内の委員会は禁煙である。三時間も煙草を吸えないことは、ますます彼を苦しめた。

人工的ではあるが涼しい環境、氷は入っていないが冷えている缶コーラ、そして、今、深々と全身に吸い込まれたニコチン。良いことばかりを無理に考えようとする。

多少、機嫌が持ち直した。

部屋には観葉植物が三鉢置いてある。いずれも、自分で持ち込んだものではない。犀川には植物や動物に対する興味がまったくない。しかし、彼は、毎日出勤すると、コーヒーメーカ用のガラスポットでこれらの居候たちに水をやった。そのポットには何ヵ月もまえからひびが入っていたが、今のところ、同等の機能を有するものが彼の部屋には他にない。

机の上には、二十一インチのディスプレイとキーボードがのっている。その脇には小さなノートパソコンが閉じられている。ノートパソコンの方はいつも持ち歩いているものだ。二キログラムという重さは、けっこうな重量だが、だいたい彼は車で移動するので気にはならない。

キーボードにちょっと触れると、アメーバのような無意味な抽象画を描いていたスクリーンセーバが一瞬で消えて、ディスプレイにごちゃごちゃとした図形が現れた。スケジュールカレンダの他に、三、四個のウインドウと呼ばれる四角形が重なっている。犀川は右手でマウスを動かすと、画面の後ろに隠れていた薄紫色のウインドウを前面に出した。このウインドウはＵＮＩＸの端末として機能している表示画面である。一度リターンキーを押すと画面が少し上方にずれて、最下段に文字が現れた。

You have new mail

新しい電子メールが届いたというメッセージである。犀川はくわえ煙草で椅子に腰を下ろすと、キーボードを叩き、画面にスクロールする文字を読み始めた。

極地研の喜多です。

いやあ仕事にならないよ。
もう二週間になるけどね。
でも、ちょっとはましになったかな。
論文の締切が迫っているし、
本当に早くなんとかしてもらいたい
ところだ。
あの警察の禿げた親父さ、
あれ頭悪いよな。
お前も呼ばれただろう？
お話にならない。たぶん、警察は
全然わかってないと思うね。
何度も何度も同じことを
きくんだからな。

まあ、お互い、災難だった。

ところで、今夜、
めし食いにいかないか？

同僚の喜多からのメールは午後三時四十分に届いたものだった。犀川と喜多は、地元、那古野の私立高校で同じクラスだった。大学も同じ、大学院も同じK大工学部で、このときは京都で同じ下宿だった。N大で助手に採用されて那古野に戻ってきたのも同時である。犀川は建築学科、喜多は土木工学科で、分野も比較的近い。もっとも、助教授になったのは喜多の方が一年早かった。犀川は助教授になっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com